

「移民三世」としてのリヴァロル

粕谷 雄一

1

現代ではリヴァロルは多くの人にとって、できれば触れたくない存在である。

「明晰ならざるものフランス語に非ず」Ce qui n'est pas clair n'est pas françaisというあの人口に膾炙した彼の言葉も、もはやフランス人が口にするのをほとんど聞くことがない。この言葉があらわれるのは周知の通りベルリン・アカデミーの懸賞に当選して刊行された論文『フランス語の普遍性について』*Discours sur l'Universalité de la langue française* (1784) の中であるが、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、英語など他の言語を明確に副次的地位に落としめたくてフランス語に優位性を認め諸国民に共有されることが望ましいとするこの論文の主張からして、現代において本気で唱えうるものとは到底考えられない。もっともベルリン・アカデミーの意図は、政治的、文化的威光からフランス語が当時実際に欧州で一種の共通語的地位を獲得していたことを前提事実としたうえでその地位にフランス語がふさわしいかどうかを問うことであったのだから、状況がまったく変わってしまった今日、議論が有効性を失うのは当然のことなのである。

それでもなおこの言葉が完全に忘れ去られてしまわないのは第一に、言語に内在する明晰性とは何かという本質的議論とは別のところで、端的に聞く人の心をいらだたせるからであろう。ふつう人間には自らの母語がもっとも『自然』なものと感じられるというのが当然のことだが、その印象をそのまま普遍的価値判断、客観的見地からの言語間の優劣序列づけということにつなげようとするなら、すべての言語は平等でありどれがどれより優れているというようなことはあり得ないという現代的信念に真正面からぶつかる主張になってしまう(明晰性ということが言語の最大の長所であるかどうかはともかくとして)。リヴァロルの言葉はちょうどそのようなもの、「自分の言葉」に「普遍的」価値の高さを見ようとする幼稚な自己中心主義からの発言のような印象を受けるのだ。さらにこの言葉が不快さを失わなかった究極の理由は、それを発言したのが自国文化の優越を誇るというイメージのある、自国語の優秀性を信じて疑わないという評判のある国民であったということだろう。とくに文化的中心意識が希薄である人々がそのことを意識したとき、このリヴァロルの言葉が尊大に、いけたかだかに響くのは当然のことであり、この言葉はいわば先入見と相互作用を保ちながら人々の記憶の中に残り続けてきたと言っていい。

フランス人一般が尊大かどうかなどということは真面目な議論の対象には値するまい。

しかし少なくともリヴァロールという個人とフランス語の関係については注意を喚起しておく必要がある。なぜならリヴァロールの言っている「フランス語」とは多かれ少なかれ彼が意識的に覚えた、あるいは覚えさせられたものを指しているはずであり「母語」を称揚したと言うには留保すべき事情があるからである。また彼が愛国者として「母国語」を称揚したということは言えても、彼の「祖国」が「自然に」フランスに決まっていたわけではないからである。

これらのことはリヴァロールをめぐる事情を少しよく見れば明白なことであり、以下の拙い小文は別にリヴァロール研究に新境地を開くというものではない。ただ世にあまりに堅固に根をおろしている一種の偏見を正す一助になれば幸いと考えるのみである。

2

アントワーヌ・ド・リヴァロール Antoine de Rivarol (1753-1801) は現在のガール Gard 県 バニョル＝シュル＝セーズ Bagnols-sur-Cèze で 1753 年に生まれた。当時毎水曜日に市の立つ比較的大きな町であった（ちなみにこの町の周辺は今日では欧州の原子力産業の中心的地域のひとつとなっている）。南仏の他の地域同様、バニョルでも当時フランス語の勢力は拡大する一方であった。Auguste Brun の *Recherches historiques sur l'introduction du français dans les provinces du Midi* (1923) によればバニョルでは 15 世紀から教育の場でもフランス語が優勢を占めはじめ、16 世紀初頭からは多くの人々が読み書きもできるようになっていた (p. 282)。むろん地域によって時期によって差はあるが南仏では方言で話しフランス語で書いていたと言っている (p. 464)。ただこれらの議論の大前提となるのは、この土地がオクシタン語の地域であって、フランス語の浸透度は相当なものであったとしてもしよせん土地の話し言葉とは違う言語であったということである。人々はフランス語の使用に苦勞し、往々にしてパリのフランス人には理解しにくいフランス語になっていたのである。

さて彼の幼少期の事実について最初に参照すべきは Léon Alègre, *Notices biographiques du Gard (Canton de Bagnols)*, Bagnols, Auguste Baile, 1880 であろう。著者のアレーグルは故郷バニョルで長年教職についていた人物で、同郷の有名人たちの列伝を出版したわけである。Rivarol (Antoine) の項（アレーグルはリヴァロールの家名に貴族の家柄を示す de を付けていない）は第二巻 195-227 ページにある。また近著では Jean Lessay, *Rivarol* (Perrin, 1989) や Michel Cointat, *Rivarol (1753-1801) : un écrivain controversé* (L'Harmattan, 2001) が参照に値しよう。とくにコワンタの著は地方に残されている公文書を調査した上で書かれた注目すべきものである。ちなみにコワンタは 1921 年生で、UDF（フランス民主主義連合）に属し欧州議会におけるフランス代表、Fougères 市長、農相、対外通商大臣などを歴任した政治家である。

いずれの本もリヴァロルの幼少期の言語使用状況をはっきり解明できているわけではない。これはおそらく不可能なことであろう。ただ彼の教育がおそらく相当早い時期から本格的に父親の手によって始められたであろうということはこれらの書、およびリヴァロルについて書かれた多数の著作が一致して認めるところである。

リヴァロルの父Jean-Baptisteが教育を受けたのはパリである可能性もあるがおそらくはバニョルにおいてである。祖父を継いで宿屋を経営していたが、やがて自らの学識をもって生活の資を得るようになった。ともかく文学的そして語学的素養の豊かな人であり、19世紀後半まで彼に教えを受けた人物が生き残っていたという。レセーは次のように述べている。

(アントワーヌの父) ジャン・リヴァロルについてともかく確かなことがひとつある。それは彼がその広い教養のゆえに実際の社会的身分よりずっと上の扱いを受けていたということである。優秀なラテン語学者であり、古代史、文学に該博であり、イタリア語を駆使し、やすやすと韻文作品をものすることができた。

Une chose est en tout cas certaine concernant Jean Rivarol : sa vaste culture le place très au-dessus de sa condition sociale. Excellent latiniste, féru d'histoire ancienne et de littérature, il pratique l'italien et écrit des pièces en vers avec une grande facilité. (p.23)

コワンタによれば、ニームで生まれた父ジャン＝バチストは文学愛好家、教養ある小ブルジョワの典型であり、

税務関係の役人をつとめ、ラテン語、イタリア語、古代史を教えていた。バニョルでは悪くない評判の家であった。

Son père, fonctionnaire des finances, enseignait le latin, l'italien et l'histoire ancienne. La famille est honorablement connue à Bagnols. (p.71)

ラテン語、フランス語教師としてバニョルの人々の評判を集めていた。

Pour les Bagnolais, Jean-Baptiste demeure le modèle du professeur de latin et de français réputé. (p.82)

としている。

このような人物の家庭なら日常会話もフランス語でなされていた可能性は十分にある。だからリヴァロルにとってフランス語は母語と言っていいほど幼少から定着していた言語

であったかもしれない。しかし父はラテン語そしてイタリア語にも熟達し人に教えていたのでありフランス語が唯一絶対の存在ではない。さらに一步家の外に出れば紛れもなくオクシタン語の世界であったということ、両親たちが出自的にも環境的にもオクシタン語を知らなかったわけがないことは明らかである。Joseph Justet, le marquis de Gaste など地元に残りリヴァロルと終生文通を続けていた幼な友達もいたのである(Justet が上京してリヴァロルと会食の席を共にした時、リヴァロルは友がパリの名士たちの中で恥をかくのを恐れて何も言わないように、何をきかれてもNonとしか答えないように忠告したというエピソードがある。p.109)。モンテーニュが親の方針で幼少からラテン語で育てられたというのは有名な話だが、だからといって彼の母語がラテン語だとは言いきかろう。その意味でリヴァロルにとってフランス語が自然で自明な「母語」あるいは「母国語」であったと言うのはいささかはばかれることだと言うべきである。

3

ただリヴァロルの場合それだけではまだ話がすまない事情がある。南仏文化の花が咲き誇った中世の栄光は失われて久しく、オクシタン語は18世紀には辺境語的立場に陥っていたわけであるが、フランス語地域から見れば辺境であるオクシタン語地域の向こう側は辺境どころではなく、フランス語に劣らぬ文化的権威を持った大言語、イタリア語とその諸方言が存在したわけである。そしてイタリア語は彼の出自の問題と密接に関係しているのである。

そもそもリヴァロルの家系、出自については彼の在世中から議論があった。しかしそれは彼のフランス人としての資格を云々するものでは全くなかった。彼にとって、それから19世紀の論者たちにとっての関心事は、彼が自称している通り貴族の家系に連なるというのは本当かどうかということなのであった。リヴァロルが自らの貴族性を主張することは、当然その家系を意識し、さかのぼることになる。母系をたどって称した貴族姓を人に難じられて放棄した彼は父系の姓Rivarolを名のらざるを得なかったわけだが、Rivarol家は祖父以前は完全にイタリア人であった。

アントワーヌの祖父Antoine-Rochがバニョルに定住したのは1735年である。彼は文盲でありイタリア名では署名も残っていないが、公文書では《Riverolys》, 《Rivarolli》を経て家名Rivarolが確定した変遷が確認できる。コワンタはその元になった名前はpiccolo luogo nella riva (川のそばの小さな場所) という意味のイタリア語Rivaroliであったらうと推定している (p.77)。

コワンタは祖父の南仏定住のいきさつについて以下のように述べている。

1685年ヴィンサリに生まれたアントワーヌ＝ロックはポー川流域、ノヴァラ州の出身で

ある。[...] 1708年頃かれはスペイン継承戦争に、フランス＝スペイン連合軍側で参戦した。[...] 1713年のユトレヒト条約はミラノ大公国をオーストリアに与えていた。[...] オーストリアはノヴァラ地方を、新サルデニア王となったサヴォワ公に与えることにした。彼のようなゲルフが、旧敵ギベリンつまりドイツ諸侯の支持者たちの支配する土地に帰れようか。

1716年頃ニームにたどりついた彼は国にかえることをあきらめ、ここに定住することにした。1720年彼はサン＝カストル教会で、セヴェンヌ地方出身でニームの「衣服仕立ての親方」であるアンドレ・ボネの娘ジャンヌ・ボネと結婚している。

Né à Vinsali en 1685, Antoine-Roch venait de la province de Novare, dans la plaine du Pô [...]

Vers 1708, il participe à la guerre de succession d'Espagne, du côté franco-espagnol. [...]

Le traité d'Utrecht (1713) donnait le duché de Milan à l'Autriche. [...] L'Autriche décide de donner la région de Novare au duc de Savoie, nouveau roi de Sardaigne. Comment un guelfe comme lui peut-il rentrer dans un pays où ses ennemis les Gibelins, partisans des princes allemands, vont commander ?

Il arrive à Nîmes vers 1716 et, se sentant proscrit, il décide d'y rester. Le 22 mai 1720, à l'église de St Castor, il épouse Jeanne Bonnet, fille d'un «maître tailleur d'habits» nîmois originaire des Cévennes : André Bonnet. (p.77)

レセーは祖父の南仏定住の動機を、より牧歌的に描いている。

澄み切った青空が、ブドウやオリーブ、桑、糸杉と同じようにイタリアを思わせた。人々はピエモンテ語とあまり変わらない方言を話していた。ピエモンテ方言の他にイタリア語、スペイン語のできる男は、容易にそれが理解できたのだ。

La pureté du ciel bleu rappelle l'Italie, tout comme la vigne, l'olivier, le mûrier, le cyprès. Les habitants parlent un dialecte pas tellement éloigné du piémontais. Un homme qui a pratiqué outre ce dernier patois, l'italien et l'espagnol, peut le comprendre sans peine. (p.21)

さて彼が家系的にイタリアに連なる人物であることをよく意識しているアレーグルもリヴァロルの才知、博識ぶりを「ガリア的」すなわちフランス的資質に結び付けるのであるが、それは自らもその一人である「南仏人」をかえってより真正のフランス人とみなし、リヴァロルをその典型例として扱うためである。

フランス国民のこの部分、その心臓では古いガリアの血がいまだに煮えたぎっている者たち、すなわち南仏人たちは、非常にはっきりした性格をもっていることで知られている。Cette partie de la nation française, au coeur de laquelle le sang des vieux gaulois bouillonne encore, les méridionaux enfin, sont renommés comme un type accentué. (p.202)

レセーも然りである。

リヴァロルはセンチメンタルなもの、誇張されたもの、地方色などテキストの中で田舎じみそうなものが大嫌いであった。彼はどこにおいても自らの力で周囲を威圧するために明確で端正な形態を執拗に追い求めた。しかしそのことは結局かれをその南仏の出自から切り離すことにはならなかったのである。彼の抽象物嗜好がどれほどはっきりしてようとも、彼の文体には太陽のもとでしか熟さないある種の震えが、ある種の優雅さが残っていた。外国人の目に、また当時の多くのフランス人の目にさえリヴァロル自身が具現しているとしか見えないパリ風のエレガンス、エスプリも、彼のなかに生きていた本物のラングドック人を隠してはいなかったのである。

Son horreur de la sentimentalité, de l'emphase, de la couleur locale, de tout ce qui dans un texte pouvait faire province, son obsession d'une forme assez claire et concise pour s'imposer partout ne parviennent pas à le couper de ses racines méridionales. Si prononcé que soit son goût de l'abstraction, son style conserve un frémissement, une grâce qui n'ont pu mûrir qu'au soleil. L'élégance et l'esprit de Paris, qu'il semble incarner aux yeux des étrangers et de nombreux Français de son temps, n'occultent pas l'authentique Languedocien demeuré toujours vivant en lui. (p.18)

ここで論者たちは彼をméridionauxと呼びそれは第一義的には彼の生まれ育った南フランスの人々を指しているのが明白であるが、この言葉は本来「南方」一般を表す言葉から由来している。北仏人にとっては南仏人もイタリア人も「南方人」に変わりはない、と言えはいささか飛躍し過ぎの議論であるが、現在のように仏伊国境がMentonとVentimigliaの間にはっきりとして存在しその両側で話される言語が截然として異なるというような状況はもちろん18世紀には存在しなかったことを十分意識しておきたい。

4

ダンテの『神曲地獄篇』フランス語訳という仕事も、当然リヴァロル自身の出自への意識が働いたゆえに抱かれた企てであるのは明らかである。

これについてアレグルは次のように述べている。

彼は大胆にもこの偉大なフィレンツェ詩人と自らの背丈を比べたのである。彼はダンテを訳した。イタリアの家系に連なることを誇る彼はこのようにして「リヴァロリ」家または「リヴァロラ」家に近寄る方法を見つけ、祖国への借りを彼なりのやり方で返したのである。

Rivarol osa donc se mesurer avec le grand poète Florentin, il traduisit le Dante. Se vantant d'être issu d'une famille italienne, il trouvait ainsi le moyen de courtiser les Rivaroli ou Rivarola, et payait, à sa manière, sa dette à la patrie. (p.206)

十九世紀における数少ないリヴァロル理解者のひとりサント＝ブーヴは彼の貴族家系証明の意図を察し次のように述べていた。

ダンテを翻訳するということをリヴァロルは「イタリアのリヴァロル家の人々に接近するよい方法だ」と自賛していた。そしてそれはまた彼の父祖の祖国への借りを返すひとつのやり方であり、間接的にアルプスの向こうにある自分の貴族的出自の証明をすることでもあったのだ。

Traduire Dante était pour Rivarol «un bon moyen, disait-il assez avantageusement, de faire sa cour aux Rivarol d'Italie,» et une façon de payer sa dette à la patrie de ses pères ; c'était indirectement faire preuve de sa noblesse d'au delà des monts. (Sainte-Beuve, *Causeries du lundi*, 27 octobre 1851, tome V, Garnier Frères, sans date, p.64)

コワンタに至っては、リヴァロルが『地獄篇』翻訳を試みた動機を以下のようにたった一行で片付けている。

イタリア系の彼は、ダンテ『地獄篇』を翻訳することを心に決めていた。

D'origine italienne, il avait décidé de traduire «L'Enfer» de Dante. (p.178)

たしかにミシェル・コワンタにはあきらかにリヴァロルを、そのイタリア的出自に引き寄せて論じようとする姿勢が感じられる。彼の著で父祖のことを扱った第二部第二章は「イタリア的伝統」*La tradition italienne*と題され、その冒頭には

イタリア人はいくつかの単純で古くからある規範を尊重する。家族、書かれた法律、外見、

言葉、人生である。

Les Italiens respectent quelques règles simples et séculaires : la famille, le droit écrit, l'apparence, le verbe, la vie. (p.87)

とある。たとえば文盲だった祖父が自分の子供の教育に熱心だったということも、長じたアントワーヌが外国にあるときも家族の面倒を見続けていたことも、このイタリア的家族愛として扱われているのである。

イタリア的伝統の影響は、アントワーヌ自身がほとんどノヴァラ生まれの祖父を知らないにも関わらず、顕著なものであった

L'influence de la tradition italienne étonne car il a peu connu son grand-père né en Novare. (p.86)
からである。

コワンタはリヴァロルのイタリア性とフランス性の折り合いについて

アントワーヌ・ド・リヴァロルはイタリア伝統主義者であると同時に、フランス人というより愛国者のように見える。

Antoine de Rivarol apparaît à la fois comme un traditionaliste italien et un patriote plus que français. (p.88)

というかなり複雑な言い方をしているのである。

リヴァロルのことを「この上なくフランス人」le français par excellence と呼んだのはヴォルテールだが、これはもちろん「フランス語の名人的話し手」《causeur》virtuose de la langue française (Cointat, p.151) としてのリヴァロルに与えた称賛である。

問題の『フランス語の普遍性について』がベルリン・アカデミーの賞を受けたことについては、

フランス人が受賞者となるということ自体異常なことと見えよう。なぜならこれは当時から受賞が難しい賞のひとつと見なされており狂信的愛国主義も、勝利者意識的なものもあってはならなかったからである。

Déjà il peut paraître extraordinaire qu'un Français soit le lauréat, car il convenait de n'être ni chauvin, ni triomphaliste, ce prix étant considéré à l'époque comme l'un des plus difficiles à obtenir. (p.152)

としていることも興味深い。

これらのコワンの記述は往々にして主張の根拠をはっきり示さない形でなされており、そのまま受け取るのはためられるのだが、注目すべきはむしろリヴァロールについてコワンのような姿勢・観点が可能になったということであろう。人物を評するのに、フランス語をあやつる巧さやフランス社会への同化だけが人々の関心の対象であった時代から多様性が評価される時代への移行が、もともとあったことながらあまり意識されていなかった事実を表に出してきたという印象さえ受けるのである。

5

現在のフランスに多人種混交、多文化共存の強みを生かす方向性を志向する政治勢力があることは紛れもない事実である。老コワンの著も明らかにその潮流の中に位置付けうるものと考えられる。しかし外部からの人的、文化的貢献を生かすというのは、いわばフランスという場が伝統的にもっていたものではなかったか。

この小論の題に筆者は、括弧つきながら「移民三世」という挑発的な言葉を用いた。国民国家も成立しているとは言えない18世紀社会にあまりに現代的観点をあてはめすぎという批判はあるだろう。しかしこれが不適切な表現になるというのは、とりもなおさずフランスが伝統的に、二、三代前の先祖が外国に出自を持つということだけではとりたてて大きな意味を持たせるのが不自然であるような場であるからなのである。